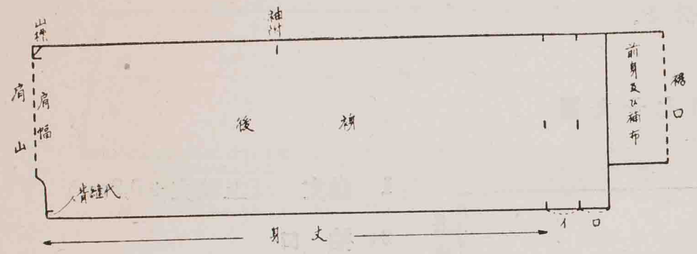
褄

左右の褄を中表に合せ肩山より丈を二つに折る。

第八十一圖



1　身丈

2　裾三つ折（イより口を0,1cm狹くする）

3　袖附（上袖丈－0,2cm）

4　背縫代

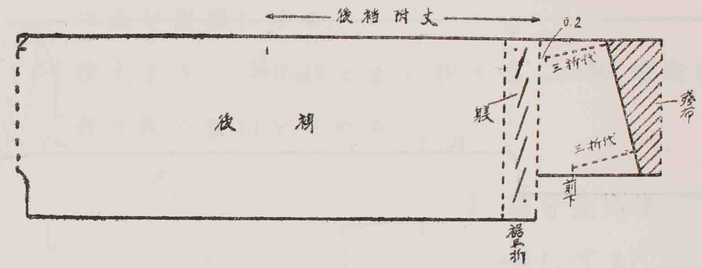
5　肩幅（袷羽織と同樣）

9　山標

前下

第八十一圖の後裾を標通り左右共別々に裏へ折り返し,三つ折にして假縫をする。

第八十二圖



1　前下

2　前幅（上幅＋1,4cmを裁目より度る）

3　前下の處に衿附縫代

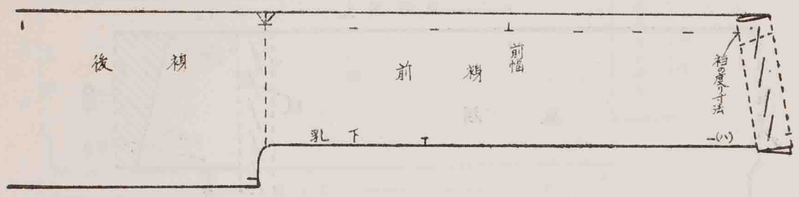
4　裾三つ折代（後と同寸）

5　殘布を裁ち切る

前稙

第八十二圖の後稙を左に開き,前裾を三つ折にして躾を掛ける。

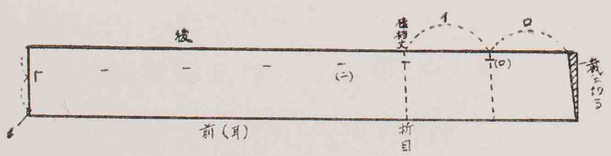
第八十三圖



1　前幅
2　前袖附曲
3　乳下
4　衿附縫代
5　後襠丈を度る

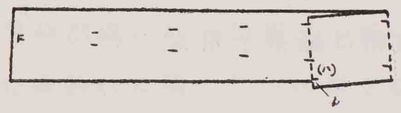
襠

第八十四圖　(其一)



1　上部紵代　(1cm)
2　後襠丈　(稙度寸法－0,2cm)
3　裾三つ折代 {(イ)は稙の折幅より－0,1cm / (ロ)は(イ)より－0,1cm}
4　後襠附　(袷羽織と同樣但三つ折山の處は上部よりの曲を自然にする。)
5　後丈より三つ折代を上に折り返し(ニ)と襠附標とを合せ裾の折山を定める。

(其二)



1　裾を左右共三つ折にする。
2　前襠附
3　(ハ)を耳より1cmに取る。
4　(ハ)より前襠附までを度る。
5　(ハ)より前襠標までの寸法を度り是と同寸法に前稙の折返山に(稙襠附標より)附ける。

衿

袷羽織に同じ。

乳

落布より乳を取り,袷より少々細く疊む,地薄の場合は撚紵にすることもある。

仕　立　方 (仕立上但肩當附)

順序

1　袖口布丈の始末　　2　袖口合及び袖下縫

3 袖口布及袖下の始末　9 縫代の始末
4 背縫　10 裾絎
5 肩當附　11 袖附及び同縫代の始末
6 乳附　12 肩當の始末
7 衿附　13 仕上
8 襠

〔備考〕

薄物の時縫糸は細い絹糸を用ひ,絎糸は羽二重糸を用ふ。但裾口及び袖口布絎は縫糸を用ふ。

方法

1 袖口布丈の始末

丈の端を折伏縫にする。

2 袖口合及び袖下縫

口明を縫ひ合せ,留をして表袖口下及び袖下を縫ふ。

3 袖口布及び袖下の始末

留より下袖口布を縫ひ,縫目を割り,之を袖口下縫目に綴ぢ附け,丸味を作り,袖下にて後の長き分を折り曲げて絎け,表返して縫目を整へ躾を掛け,袖口布の奥を折つて絎け附ける。

4 背縫

普通の場合は小針にて二度縫をする,若し耳糸の變つたもの又は切込の入れてあるものは袋縫にするか,縫

代の端を折り曲げて絎け附ける。

5 肩當附

肩當の前後の端を,細く三つ折絎にし肩當の背を縫ひ,袵の背と綴ぢ合せ,衿肩及び前の端を揃へて躾を掛ける。

6 乳附

男袷羽織に同じ。

7 衿附

男袷羽織に同じ但裾三つ折の間は衿を表に折り返した時釣れぬ樣に三つ折幅を緩めて置く。

8 襠

襠の上部を三つ折絎になして後襠を附け次に前襠を附ける。(裾の方は裏の三つ折山より一針中から縫ふ)

9 縫代の始末

襠の縫込みの端を裏に折り,是を脇縫込に絎け附け(襠縫込幅の廣い場合は,廣い所を少々深く折り込むか,又は袵に絎け附けるかする)袵の縫込は,袖附で縫込の釣れるのを伸ばして釣合を取り,耳だけ折り曲げて絎け附ける。(裾三つ折山より一針中まで絎ける,又肩當の中は絎け殘す)

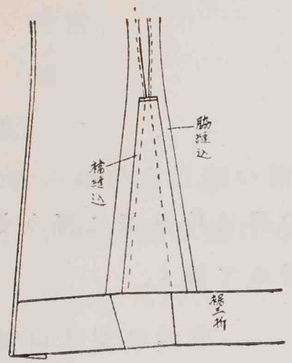
10 裾絎

各縫目は逆針を使つて絎ける。

11 袖附及び同縫代の始末

袖附止を四つ留にして袖を附け,縫代が多い時は端を折つて絎け附け,少い時は其のまゝ袖下縫込に綴ぢ附ける。

第八十五圖　袖附の裏



12　肩當幅の始末

幅を定め單衣の如く袖附縫目の際に絎け附ける。

13　仕上

薄物の仕立方の注意

絽の類は絽目を眞直になる樣地直しをする。各折山及び留縫目等は透けた處にならぬ樣にする。

衿芯は同色のものを用ひ,生地は餘り厚く堅くないものを選ぶ。

肩當は附けない方がよい,附けない時は,衿肩廻りに力布を當て,衿を附ける。

毛織物仕立方の注意

縫代の始末

縫代の端を折つて纏つるか,地厚の場合は耳又は裁目のまゝ千鳥掛けにする。

袖口布の下端は裁目のまゝ千鳥縫にするか,卷縫にしたまゝ置いてもよい。

廣幅の場合

背に縫目を附けぬ方がよいが,若し縫目のある場合は縫目を割つて縫代の始末をする。但地薄物は片返にしてよい。

裾の三つ折。

地厚物は三つ折の中の折込を2cm位に淺くして平にする。

袖附縫目

割る方がよい。

鈎　　襠

裁方積方

所要仕立上寸法

袖丈53cm　身丈104cm　繰越1cm

並幅　總用布968cm

附圖第八十六圖參照

{總用布－(4袖丈＋衿丈＋2前下)}÷4＝後身丈

後身丈＋前下＝前身丈　但衿附の方

衿丈

棒襠に同じ

裾折返

後身丈－上身丈＝裾折返

襠丈

棒襠に同じ

鉤襠裁方

第八十七圖　（其一）

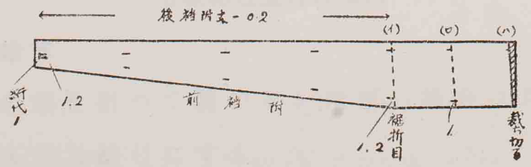
（其二）

其の一にて裁ちたるものを二枚重ねて襠の丈を定め裁ち切る(一方は裏が出る)

標　附　方

襠

第八十八圖　（其一）



1　上部衿代

2　後襠丈(稽度寸法－0.2cm)

3　前襠附

4　後襠附

5　裾の三つ折幅を定めて殘りを裁ち切る。

(イ)(ロ)(ハ)の幅の定め方及び裾折山定め方は棒襠に同じ。

（其二）

1　裾を三つ折にする

2　(二)點を度る(度寸法を前稽に附ける)

其他は棒襠に同じ。

仕　立　方（棒襠裁と異る點）

〔注意〕

斜に裁ち合せた處は解れ易く又伸び易いから,斜の方を附ける時は袋縫にする。

襠上部

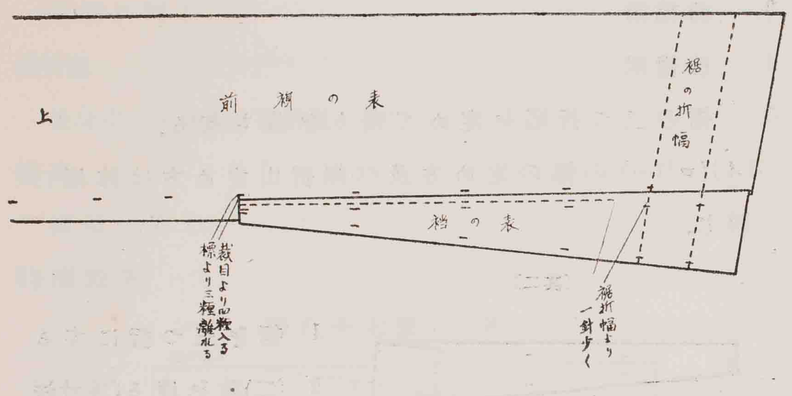
三折衿にする。

前襠附

前稽の表側に標より 0.3 cm 離れた處に襠の裏裁目を合せ(斜の方)襠の裁目より 0.4 cm 入つた處を縫ひ,折は襠の方へ返し 0.1 cm の被を掛ける。(第八十九圖 參照)

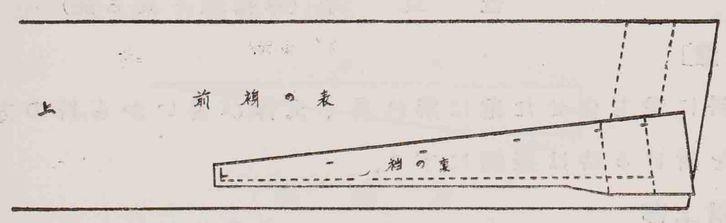
前檔附

第八十九圖（其一）



第八十九圖(其一)の如く前檔附の標を合せて裾紒折山より一針多く縫ひ,折は前褄に返す。

（其二）



第十三章

女單羽織

裁方積方

男物に比べて檔丈が長くなるから,補布を多く要する他は男物に同じ。

補布

2{袖口布丈－(袖附＋身八口)＋檔上部紒代－繰越}＝補布

標附方

振八つ及び身八口,があり,檔上部の幅を廣く標する他は男物に同じ。

仕立方

振を三つ折紒にする,他は男物と大差なし,但袖附の處で袖縫込の少いものは袖附止りより一針上まで紒け,それより上は其のまゝにするか或は耳紒にする。

〔注意〕

單羽織の紋合は縫代が見えるから紋の兩端を透かないものは下の縫代のみ一枚を斜に縫つて留め,透くものは斜に縫はないで紋合の縫目に二針縫ひ返し置く。立しぼ等で,裾口の折山が殊に前裾の斜が伸び易い時は,表の裾山に目立たぬ樣に,小針を出して(針目1cm位)縫て置くか又はテープを入れて粗く纏り附てもよい。

第十四章

總落仕立單羽織

此の仕立方は,明石,絹,紗の如き薄物を入念に仕立てる時の方法で,精巧な技術を要し,又贅澤な仕立方である

仕立方

方法（縫代の始末）

縫代を0.5cm乃至0.8cm殘して裁ち切り,各縫目は細かに縫ひ,着せを0.1cm掛け着せの掛かつた方の縫代を0.3cm殘して裁ち切り,廣い方の縫代を折り伏せて絎げるか又は纏り附ける。

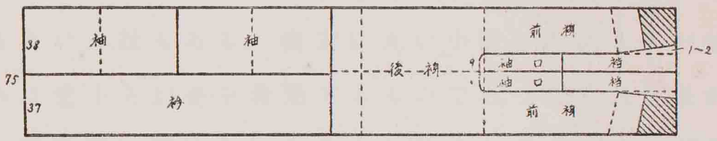
第十五章

廣幅物單羽織

裁方積方

袖丈長き場合

第九十圖



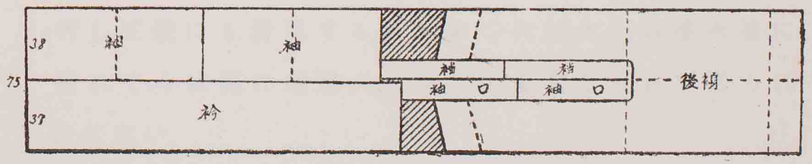
4袖丈＋2(上身丈＋折返)＋補布＝總用布

〔備考〕

裾の折返より下を自然に1cm乃至2cm曲げて襠を廣く裁ち落す樣にしたが,眞直にしてもよい。

袖丈短かき場合

第九十一圖



衿丈＋(上身丈＋折返り)＋2袖口布丈＝總用布

〔注意〕

用布が十分ある時は第九十圖と同樣に襠を落し,袖丈處のに切れを出してもよい。

被布

第十六章

總論

名稱及び沿革

被布は被風とも書く,語義を詳にしないが,外來語であるといふ說もある。後方に丸い小襟を附けるのが始めは堂上方が是を着用するものであつたと云ふ,是が一般民間に用ひられるやうになつたのは享和の頃で,其の始は剃髮總髮の男子に限られて居つたが,後には月代頭の俗人にも着用される樣になつた。

文政の頃には婦人僧尼も是を着用し,女子は色々の派手な模樣物や紫縮緬に黑天鵞絨の小襟,金糸組紐の飾を附けたもの等が用ひられた。

明治年間には專ら寡婦の上品な常服の一つとして流行し正裝にも着用する事があつたが,大正以後次第に廢れて,今は僅に老婦人,女兒にのみ用ひられて居るに過ぎない。

長着を基とする割出寸法の定方

種類 / 名稱	大裁	中裁及び小裁
竪衿下	衽下＋2cm	同樣
竪衿幅	下｜衽幅と同寸 上｜相褄幅と同寸	同樣
小衿丈	(竪衿下＋繰越)×2	同樣
小衿幅	小衿丈×$\frac{1}{6}$～$\frac{1}{5}$	小衿丈×$\frac{1}{5}$～$\frac{1}{4}$

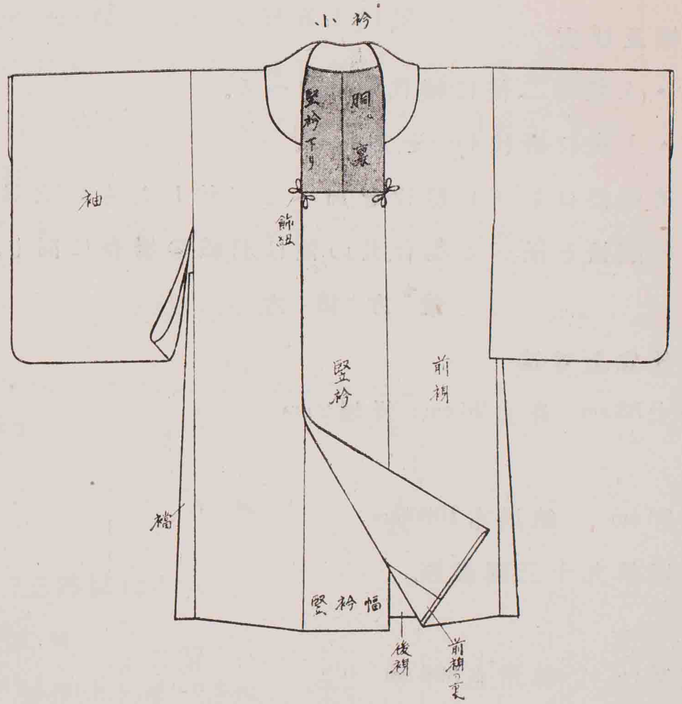
以上の他の寸法は羽織と同樣であるが,身丈は羽織より2cm乃至3cm長くする。

第十七章

大裁女袷被布

各部の名稱

第九十二圖



普通仕立上寸法

竪衿下25cm　　竪衿幅｜上13cm / 下15cm

小衿丈54cm　小衿幅9cm

其の他は羽織と同様

裁切寸法の定方

竪衿丈

上身丈よ竪衿下りを減じ,前下と上下の縫代5cmとを加へる。

小衿幅及び丈

幅・上幅の二倍に縫代6cm加へる。

丈・上丈に縫代4cmを加へる。

前後の差は前下に縫代を加へて二倍したもの(之は前後の胴接を揃へる場合)其の他は羽織の場合に同じ。

裁方積方

所要仕立上寸法

袖丈53cm　身丈96cm　繰越2cm

表

幅36cm　總用布1090cm

附圖第九十三圖參照。

裏

幅36cm　總用布396cm

裁方圖

女袷羽織と同様

8(上袖丈+上身丈)+2竪衿丈+裁切

小衿丈+總縫代−表用布=裏總用布

總縫代

袖下　2cm×8=16cm
胴接　5cm×8=40cm　合計76cm
前下　5×4=20cm

標附方

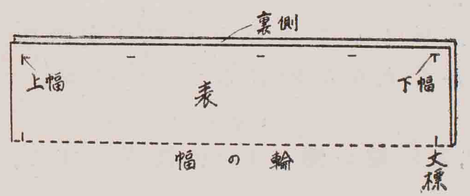
袖・裾・襠は大裁女羽織と同様。

但羽織にて乳下の標を竪衿に換へ又,羽織の衿附の裾口を縫ひ込みたるを被布に於は眞直にする。

竪衿

中表に二枚重ね表幅を17cmにして幅を二つに折る。

第九十四圖



1, 上部縫代(2cm)

2, 丈標

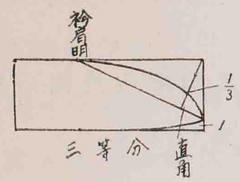
3, 幅標(上下)幅+0,2cm

小衿

紙型の取方

第九十五圖

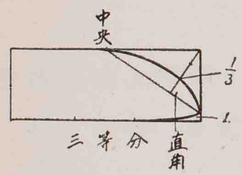
A小竪幅を丈の$\frac{1}{5}$とした場合



幅(上り幅+0,4cm)

丈(小衿丈+4cm)

R小衿丈の$\frac{1}{6}$とした場合



幅丈の定方は同圖に同じ。

相違點

幅が狹くなる故衿山の方は丈の中央から丸味を附ける。

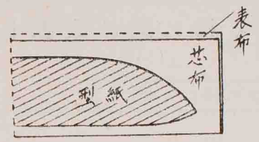
〔注意〕丸味を附ける時,先の細い處は1cm位眞直にする。

丈は好みにより斟酌してもよい

標附方

小衿を中表に合せ,幅及び丈を二つに折りて平に置き,其の上に芯布を丈二つ折にして載せ,丈の輪を揃へる。

第九十六圖



1, 型紙を圖の如く置く

2, 附及び山に型紙通り標をする。

3, 丸味の終り及び中途に合標をする。

〔備考〕

芯布は表地質に應じた布(晒木綿・金巾・新モス等)を選ぶが,表布幅廣き場合は三つ折に疊み,一枚を芯にする事もある。

仕立方

順序

1 袖
2 前下
3 胴接
4 背縫
5 襠附及び身八つ口
6 袖附
7 小衿下縫
8 竪衿附
9 小衿
10 仕上
11 飾紐の附方

方法

1より6までは女袷羽縫の縫ひ方と同樣。

7, 小衿下縫

小衿下の間を表が0,1cm 裏に折り返る樣に縫ひ表返して躾を掛ける。

8, 竪衿

(1) 地薄のものは柔かき芯布を表の裏に合せて廻りを躾で押へ,是を裄竪衿附の處に合せて縫ひ附け,(竪衿下の止りは裄縫代を淺くそれより裄の縫代は自然に開き置く)折は竪衿の方へ返し裏裄を綴ぢ附ける。

(2) 竪衿の下部を標より表は0,4cm淺く裏は標通りに縫ひて表に返す

(3) 竪衿の上部を0,4cm淺く縫ひて表に返す。

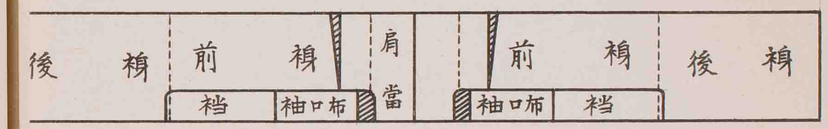
(4) 竪衿の裏を折りて紮け附ける。

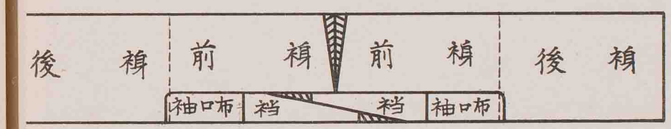
9, 小衿

(1) 表衿の裏に芯布を合せて重ね,廻りを躾で押へ,表は標通り裏は0,8cm深くして表裏の合標を合せて縫ひ(丸味の處で表の緩むは平に納めながら縫ふ)芯は縫目の處より切り取り(共布を芯になしたる場合は切り取らぬ)折は裏に返す

(2) 丸味の處は縫目より0.5cmづゝ離して二度縫ひ.此の糸を引き締めて襞を平になし.下の方にて襞山を押へ,表返して躾を掛ける。

(3) 小衿の裏幅を少々釣加減にして,附の方を躾で押





返し

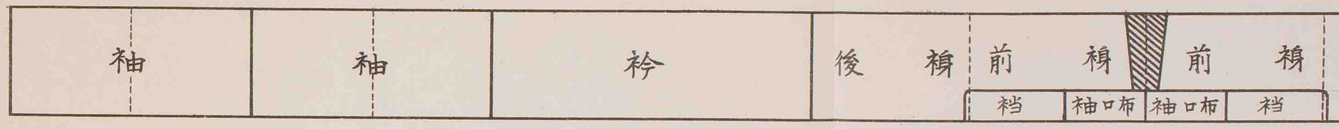
廻り
り,(竪
自然
る。
りに

へ,表
縫ひ
は縫
切り

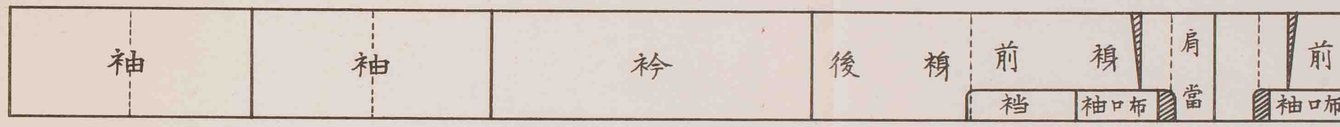
ひ.此
を押

で押

第七十六圖

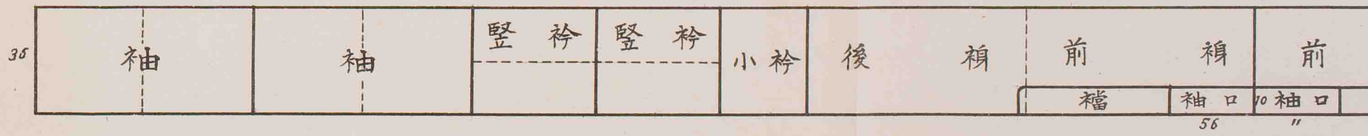


第七十八圖

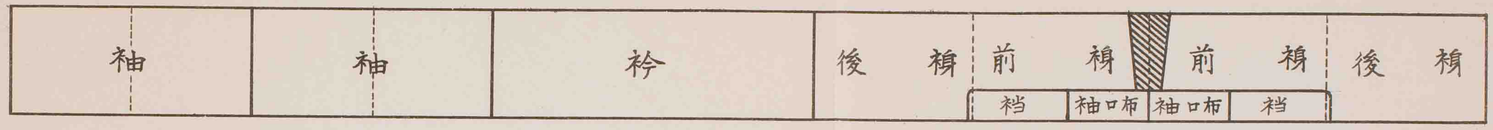


第八十六圖

第九十六圖



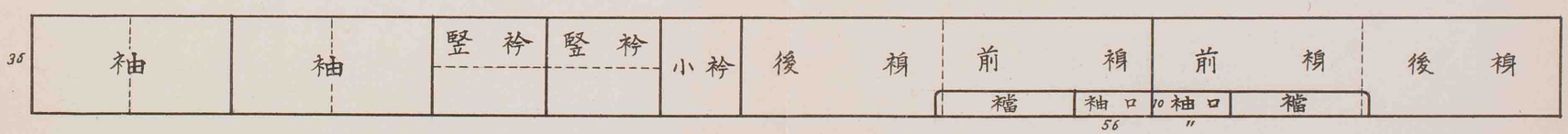
第七十六圖



第七十八圖

第八十六圖

第九十六圖



へ,表小衿丈の中央と裏脊とを合せて,衿肩廻では羽織と同様に衿を綏くして左右に釣合を取つて縫ひ附け,折は襟の方へ返し其の上に表襟を折り附けて絎ける。

11.飾紐の附方

(1)　上前竪衿の上端に釋迦結のある紐を綴ぢ附け,前襟の小衿下の處に輪の方を良く合せて綴ぢ附ける。(此時左右の形の異らない様に注意して,裏には中央に小針を出し紐の廻りを細かに纏り附ける。)

(2)　下前竪衿の上の裏角に釋迦結を,左小衿下の裏側に受紐を置き綴ぢ附ける。

但此紐の足は裁目の見えぬ様に共布にて包んで置き,其の廻りを纏り附ける。

〔備考〕

中の紐はスナップを用ひても差支へない。

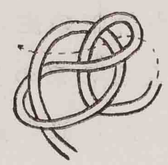
小衿を附ける時襟で小衿を挾み,又竪衿で前襟を挾み四つ附にする場合もある。

第九十七圖 紐の結方

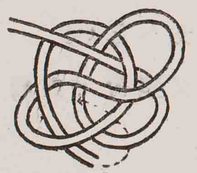
釋迦結

(1)

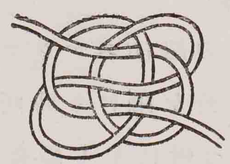
(2)



(3)



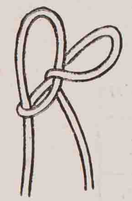
(4)



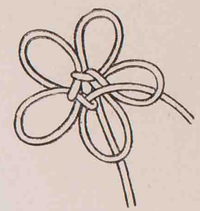
(5)

梅結

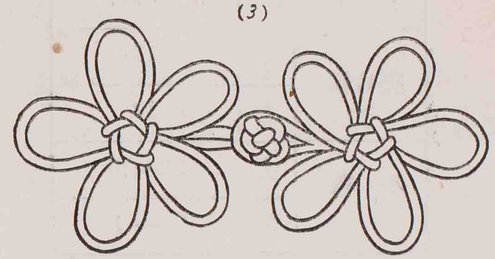
(1)



(2)

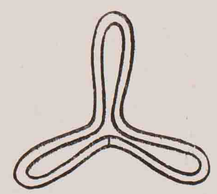


(3)

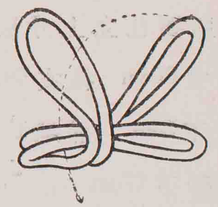


新橋結

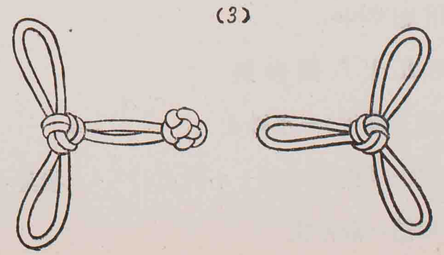
(1)



(2)



(3)



第十八章

中裁綿入被布

（十歲前後）

仕立上寸法

單位cm

名稱		寸法
竪衿下		15～17
竪衿幅	下	13
	上	12
小衿	丈	23～36
	幅	8 ～ 9

他の寸法は羽織と同樣

裁方積方

所要仕立上寸法

身丈80cm　袖丈58cm

前下3cm　繰越1cm

竪衿下17cm

並幅　總用布690cm

附圖第九十八圖參照

2（竪衿下＋繰越＋縫代）＝小衿丈

{總用布－（4袖丈＋2前後の差＋小衿丈）}÷4＝後身丈

後身丈＋前後の差＝前身丈

〔備考〕

1 總丈が割合に短かく,身丈の長い場合に,襠丈が不足する事がある。此時は後身の中央で補布を取ればよい。

2 小衿を竪衿布の端から取る事がある,此の場合は前後の差に注意する。

裏並幅

附圖第九十九圖參照

{袖丈＋（2上身丈－表後身丈＋胴接代）×4＝裏總用布}

標附方

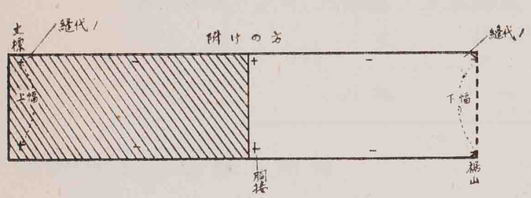
袖·褄·襠は羽織と同樣,

小衿　寸法の差があるのみで大裁被布と同樣。

竪衿

表裏共中表に二枚づゝ重ね,表布を上部より竪衿丈に縫代を加へた寸法に取りて殘りを折り返し其の上に裏を載せる。

第百圖



1　丈標
2　胴接標
3　竪衿附縫代
4　竪衿幅
(上下幅＋0·2cm)

仕立方

順序

1　袖
2　前下
3　胴接
4　背縫
5　後襠附
6　前襠附
7　竪衿胴接
8　竪衿附
9　身八つ口縫
10　袖附
11　表小衿下に躾
12　綿入
13　裾口假綴及び背,前襠綴

14　袖口絎
15　小衿下含綿及び絎
16　竪衿の始末
17　小衿縫
18　小衿附
19　仕上
20　飾紐の附方
21　肩揚

方法

1より6までは綿入羽織に同じ。

7竪衿胴接

竪衿の胴接をして折は裏に返す。

8竪衿附

竪衿の裾山と前褄裾山とを合せ,それより上部に釣合を取りて縫ひ(前下の縫目の處は返針をして留める)折は竪衿の方に返す。

9より10までは綿入羽織に同じ。

11表小衿下に躾

12綿入

竪衿があるのみにて綿入羽織に同じ(竪衿の部分は稍綿を薄目に布幅いつぱいに入れる)

13より14までは綿入羽織に同じ。

15小衿下含綿及び絎

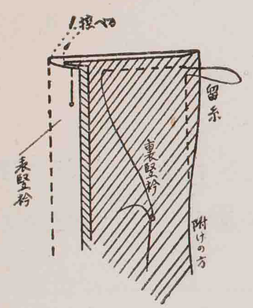
小衿下の裏に綿を含めて綴ぢ,表と合せて絎ける。

16竪衿の始末

(1) 竪衿の上

附の上部にて竪衿で稽を挾み四つ留をなし,其の糸にて上部を0.4cm淺く縫ひ(竪衿幅の方は表を標通り縫代を表に折り,其の下に裏を1cm控へて重ねる)折は裏に返し表側に綿を平に入れて引き返す。(第百一圖參照)

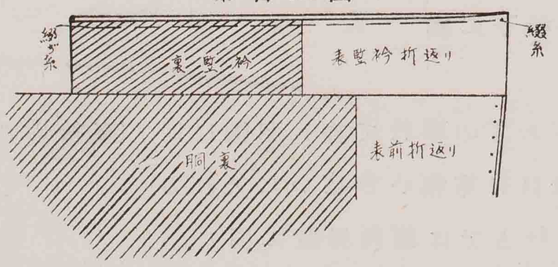
第百一圖



(2) **竪衿紵**

幅標より外の綿を薄めて布と共に縫代を折り返し,裏を百二圖の如く折り下部を褄形になる樣に控へ假綴をして紵ける。

第百二圖



17 **小衿縫**　大裁袷被布に同じ

18 **小衿附**

稽の小衿を附ける處の縫代を表裏合せて綴ち(其處の綿を薄める)表衿を裏稽に合せて縫ひ附け,折は小衿の

方へ返し,裏小衿を稽の表側に紵け附ける。(大裁袷被布の如くにしてもよい)

19 **仕上**

20 **飾紐の附方**

菊結及び梅結を大裁と同樣に附ける。

但總の附いて居る場合は總を眞直に下げる。

21 **肩揚**

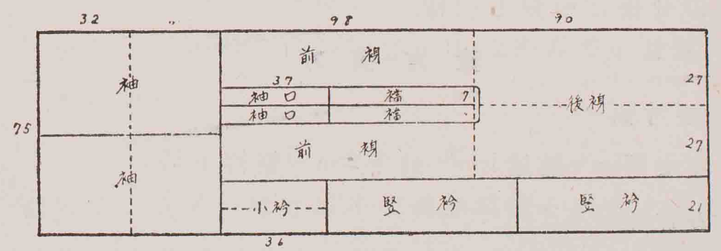
中裁羽織と同樣に恰好よくする。

廣幅物裁方積方

元祿袖

幅75cm　總用布252cm(八歳前後)

第百三圖



2{袖丈+(上身丈+折返)}+前後の差=總用布

〔備　考〕

五六歳の時は身幅を狹く,竪衿幅を廣くする。

第十九章

小裁袖無被布

仕立上寸法

單位cm

名稱		寸法
竪衿下		12～13
竪衿幅	下	12
	上	11
小衿	丈	26
	幅	9

他の寸法は中裁と同樣。

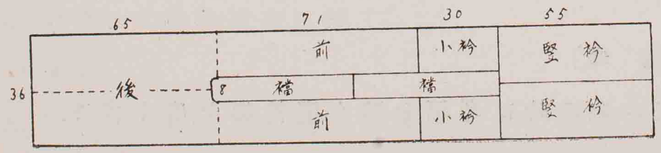
裁方積方

所要寸法

身丈55cm　繰越1cm　前下2cm　竪衿下13cm

表並幅

第百四圖



上身丈－竪衿下＋前下＋折返及び上部縫代＝竪衿丈

2(上身丈＋折返)＋前後の差＋小衿丈＋竪衿丈＝總用布

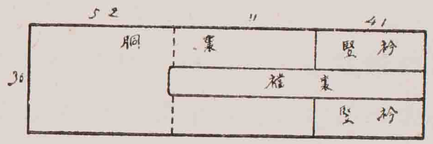
〔備考〕

用布が多くある場合は竪衿を二丈け取り,其の幅の端を落して襠になし,前の落は小衿にする.

裏

幅　36cm　總用布　145cm

第百五圖



標附方

1　襠　　小裁袖無羽織に同じ。

2　竪衿　　小衿は寸法の差があるのみで中裁綿入被布に同じ。

仕立方

襠附及び脇明の縫方は小裁袖無羽織と同じく,其の他は總て中裁綿入被布に同じ。

袴

第十九章　總　論

名稱及び沿革

袴の名は穿く裳から轉じたものと云ふ。男子の袴は上代から用ひられてゐたことは、埴輪に短い上衣に太い寬い袴を穿き膝の下を細紐(脚結といふ)で結んで居る姿を見ることによつて知られる。

奈良時代には唐制に倣つて、各階級の制服が定められたが、男子はすべて袴を用ひ、これに表袴と下袴とがあり、形には括袴(裾口を括つたもの)と後世いふ大口(裾口を括らないもの)とがあつた。平安及び鎌倉時代は、前時代の續きで、公卿は束帶の下に表袴と赤大口(下袴)を着し、直衣の下には指貫括袴である)を用ひた。下級文官や武家の着服である狩衣、水干、直垂、大紋、素襖には括袴が多く用ひられ、庶民は四幅袴を穿いた。かくして中世は通じて袴を常用して居たが、近世に至つては次第に之を廢した、室町時代以後には袴を括らず長く後に引く長袴が武家に用ひられ初め、之が德川時代には禮裝の袴となつた。長袴に肩衣を着したのを長裃と呼んだ。普通に用ひる袴の襠が次第に低くなつて是を平袴と呼んだ。德川末期には襠の高い馬乘袴が平袴に代つて常用せられ、遂に明

治維新から馬乘袴と紋附羽織とが男子の略式禮裝となつて今日に及んだのである。十番馬乘袴とは麻布十番にあつた馬場で多く用ひられたものであるといふ。袴の腰板を附けるのは德川初期から起り、是が近世の袴特色である。

女子の袴は平安朝までは上下を通じて常に着してゐたが、次第に廢れて鎌倉時代からは上流女子以外には用ひられなくなつた。明治時代の初めに華族女學校で古制の濃色の女袴に倣ひ、色を海老茶色となし、形は襠のないものを以て女袴とし、之を制服と定めた。其後女子高等師範學校から全國の學校に普及したのである。

明治中期以後女の襠のない袴に倣ひ、男子にも行燈袴と稱して襠無袴が用ひられ初めた。

近年は學校制服が洋服となり、男女兒共に袴を用ひる事少く、且つ男子一般にも洋服を着用する者が多くなり、袴は廢れて行く狀態である。

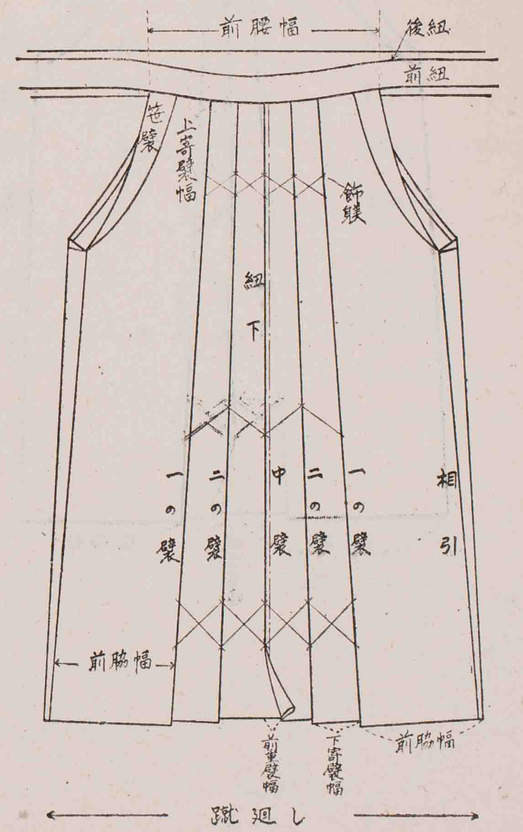
第二十章

大裁女袴

各部の名稱

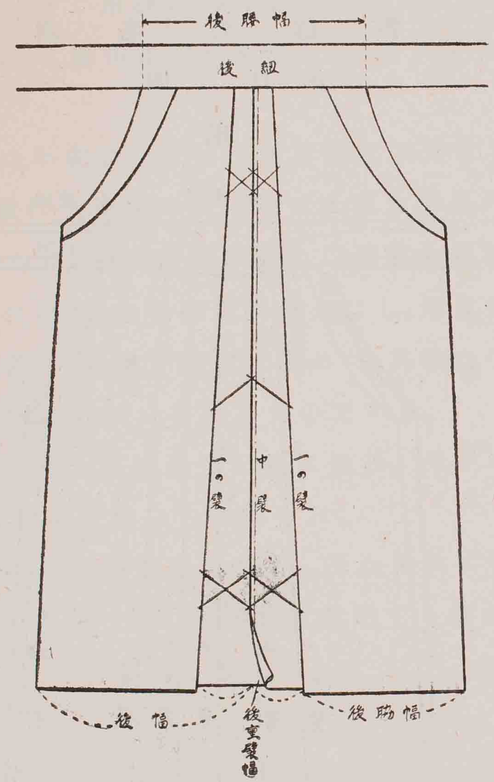
第百六圖

前



第百七圖

後



地質及び布幅

	地質	布幅
毛織物	メリンス	75cm
	セル，サージ	75cm…… 144cm
	アルパカ	75cm……144cm
	カシミヤ	110cm……144cm
絹織物	琥珀	72cm
	鹽瀨	72cm
	精好	37cm……40cm
	紬	36cm
綿織物	綿セル	73cm
	綿カシミヤ	73cm

各部寸法の割出方及び寸法表

種類 / 各部名稱	大裁 割出		大裁 寸法	中裁小裁 割出
紐下	着丈 × $\frac{7}{10}$ 又は＋3		87.	着丈 × $\frac{6}{10}$
相引	紐下 × $\frac{2}{8}$ ＋ 2 ～ 3.		61.	紐下 × $\frac{2}{3}$
後幅	長着後幅 ＋ 2.～ 4		30～32	
後脇幅	後幅 × $\frac{3}{4}$		22.5	
後重襞	3～4		3～4	2.5～3
後寄襞幅	下	後幅 × $\frac{1}{4}$	7.5	
	上	後幅 × $\frac{1}{8}$	3.8	
後腰幅	後幅に同じ		30.	
後笹襞幅	後脇幅 × $\frac{1}{4}$		5.5	
前脇幅	後幅 × $\frac{3}{5}$ －0.5		17.5	
前重襞	3～4		3～4	2.5～3
前寄襞幅	下	後幅 × $\frac{1}{5}$	6.	
	上	後幅 × $\frac{1}{10}$	3.	
前腰幅	後幅と同寸又は＋2		30～32	後幅＋2.
前笹襞幅	前脇幅 × $\frac{1}{4}$		4.5	
後紐	丈	胴廻 × 2.5	200	
	幅	5～6	5～6	
前紐	丈	胴廻 × 3.5	300	
	幅	4.～5.	4～5.	

裁切寸法の定め方

1　後布丈……紐下＋裾絎代＋上部縫代
　　2cm　10cm

　後布總幅……後幅 × 2 ＋ 襞の深さ × 8
　　30cm　7cm

2　前布丈……後布丈に同じ

　前布總幅 ……後幅 × 2 ＋ 襞の深さ × 12
　　30cm　7.5cm

3　後紐幅……上幅 × 2 ＋ 2cm 乃至 3cm

『注意』 尙布幅の都合によりては襞の深さは 1cm 乃至 2cm の增減は差支なし。

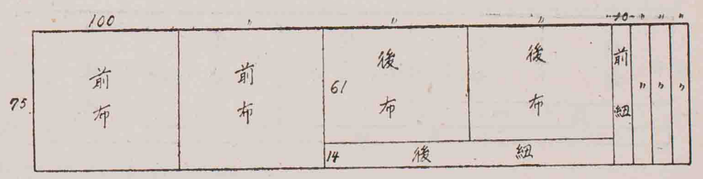
裁方積方

所要仕立上寸法

紐下 88cm

幅　75cm

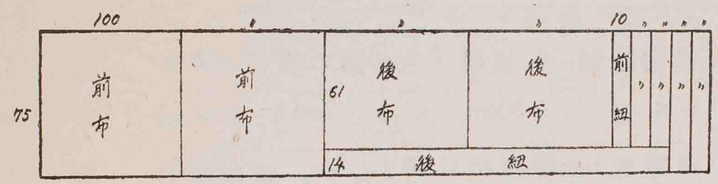
第百八圖



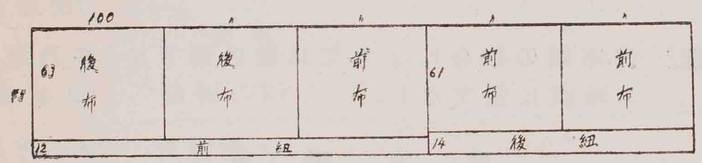
紐下＋裾絎代＋上部縫代＝裁切布丈

布丈 × 4 ＋ 前紐幅 × 4 ＝ 總用布

第百九圖（前紐を長く要する場合）

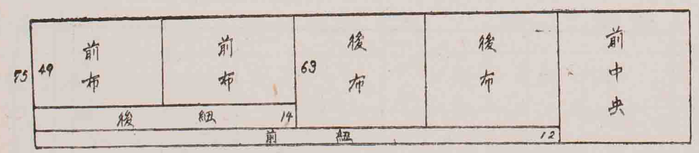


第百十圖



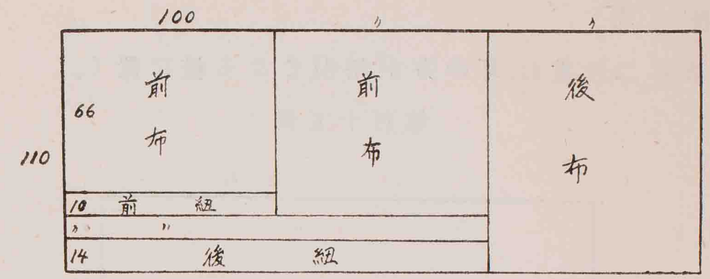
布丈×5＝總用布

第百十一圖（前紐を長くする場合）



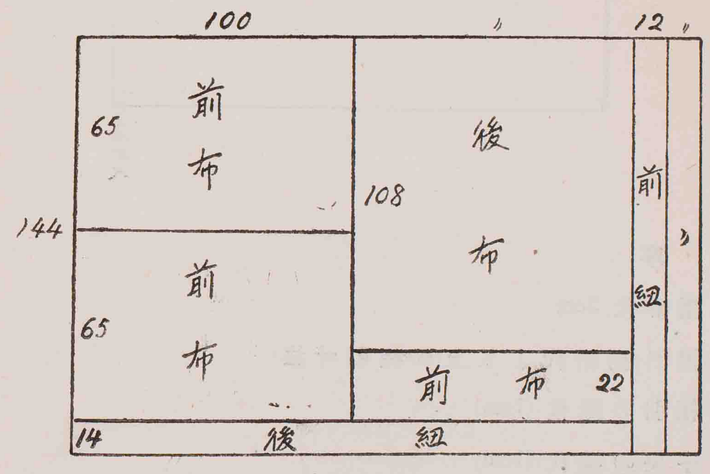
幅　110cm

第百十二圖



幅　144cm

第百十三圖



『備考』前紐丈不足の時は三本取る。

幅　36cm

附圖第百十四圖參照

3（紐下＋裾絎代＋上部縫代）＋後紐丈＝總丈

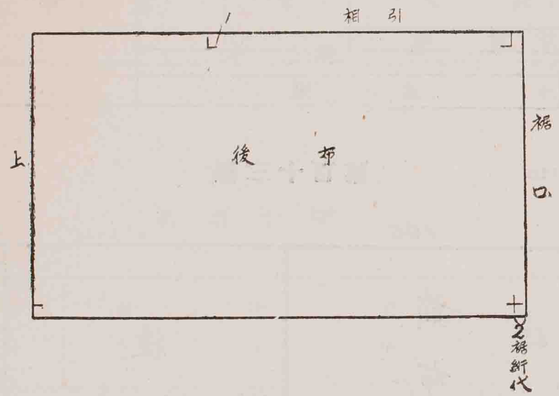
『備考』大裁女袴前袴には切上を 2cm 位附けることもある。

標附方（後三つ襞前五つ襞）

後　布

中表に二枚重ね，耳の方が相引となる様に置く。

第百十五圖



順　序

1　裾紆代 2cm

2　相引（裾紆代より上に相引寸法）

3　相引の縫代（1cm）

4　中央の縫代（1cm）

前　布

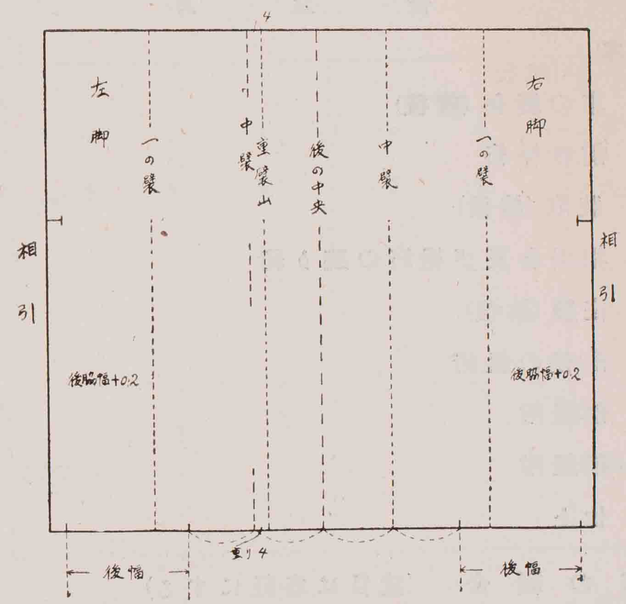
布の置き方及び標附方は後布と同様。

『注意』

1　毛織物の標附はチョークで一枚一枚附けるか，縫標にする。

後襞山の定め方

第百十六圖



後寄襞の取方

襞山を折り（折の附き難い物は躾で抑へる）次に左の中襞を後の中央より重り（4cm）だけ出して疊み，その上に右の中襞山を後の中央と合せて重ね，躾をかける。次に裾口を右にして下に平に置き，紐下の標を附け，左右一の襞山を寸法に從つて寄せかけて襞を取り躾をかける。

2 瘠形の人或は好みによつて相引止りにて幅を1cm縫込み相引を斜にすることもある。

仕立方

順序

1 布の縫合(前後)
2 前後裾絎
3 襞取(前後)
4 相引合及び裾絎の殘り絎
5 笹襞(前後)
6 前後の紐絎
7 前紐附
8 後紐附
9 仕上

1 布の縫合　(裁目は卷縫にする)

後布及び前布を二枚合せて懷を縫ひ,折りは背と同樣に返す。尙脇に縫目のある場合は奥布の方へ折りを附ける。

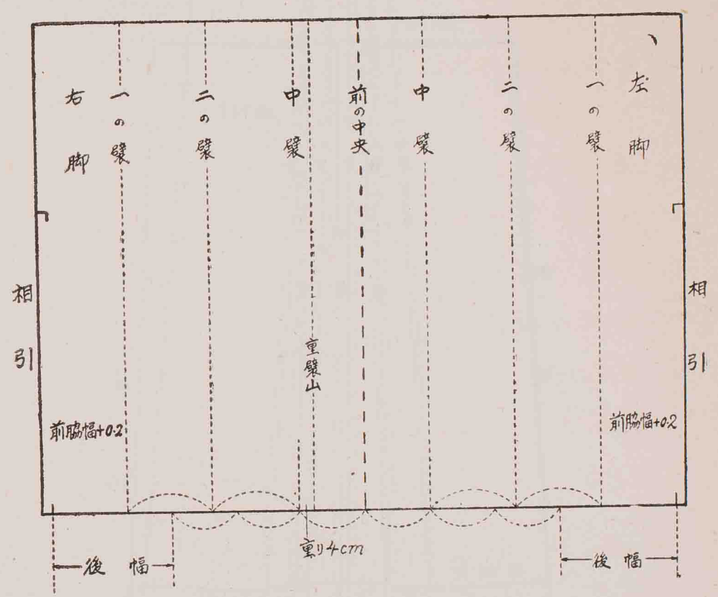
2 前後裾絎

裾口を三つ折にして針目1cm位に絎ける。但脇にては各布共5cm程絎け殘し,終りの糸を30cm程殘して置く。

3 襞取

前襞山の定め方

第百十七圖



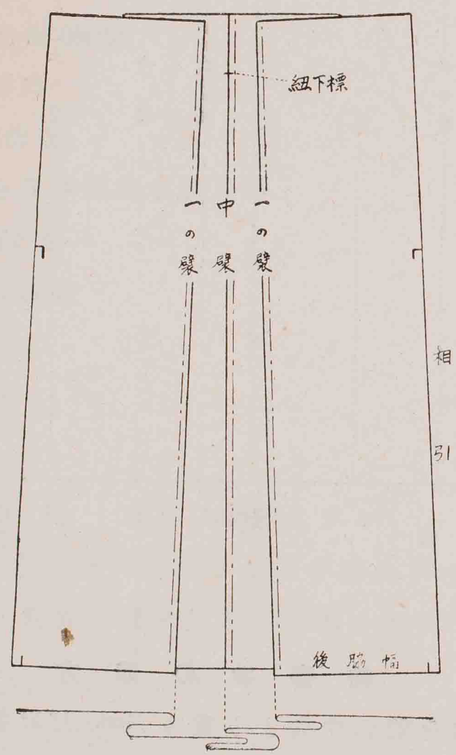
前寄襞の取方

右の中襞を前の中央より重り(4cm)だけ左に出して疊み,その上に左中襞山を前の中央と合せて重ね,鞐をかけ,次に紐下標をなし,二の襞一の襞と順次に襞を取り,鞐をかける。

寄襞を取り上げた圖

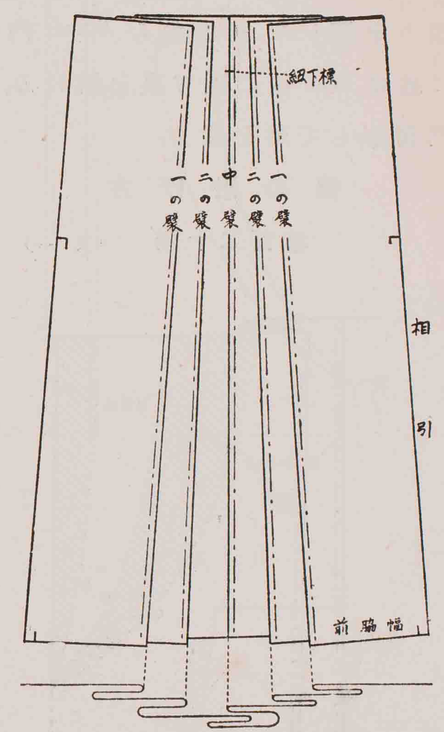
第百十八圖

後



第百十九圖

前



4　相引合及び裾衍の殘り衍

相引の標を合せて縫ひ,前の方に折りをつけ,裾の衍け殘りを衍ける。

5　笹　襞

笹襞になる所の耳をよく伸ばして置く。

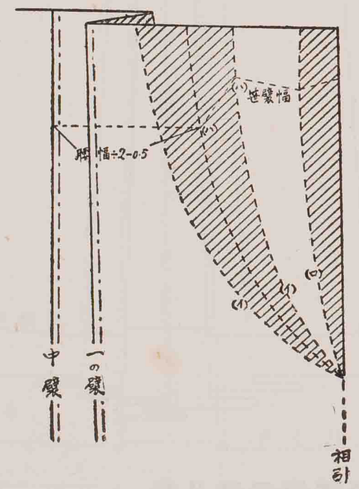
上部縫込みの處で,腰幅の二分の一より 0.5cm 減じた處

に標をなし,其處より表に折返して笹襞幅を定め殘りを(口標)眞直に裏に折り,次に外側の(イ標)の處を格好よく笹の葉形に折り,鏃を掛けた後輕く鏝で折りを附ける.笹襞の奥の折りを開いて,折山から 0.2cm 內側に下部三針位は 1cm に他は 2cm 位に綴ぢ裏を絎ける。

相引止りに門留をして壓を置く。

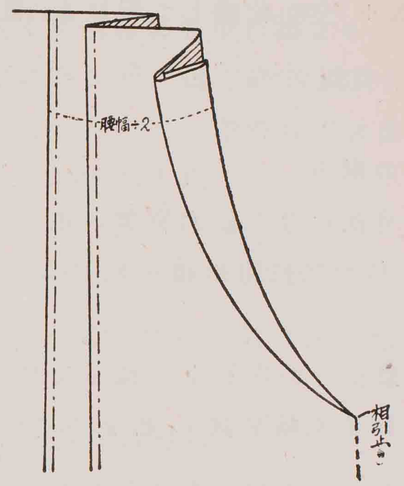
標の附げ方

第百二十圖　(其一)



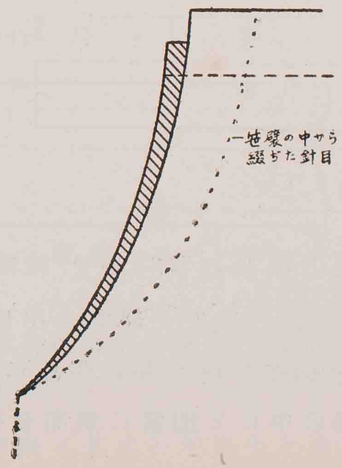
前圖の標を折り疊んだ處

(其二)



裏面

(其三)



6　前後紐絎

前紐を掛接ぎとし，紐幅を定め中に芯を入れて兩端を縫ひ，中央を腰幅＋10cm 位殘して絎ける。後紐も前紐と同様に絎ける。

7　前紐附

(イ) 前紐附標の附方

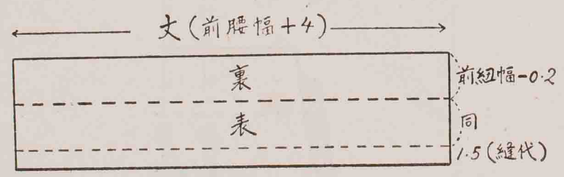
中央にて紐下寸法になし左右笹襞の端にて 0.8cm だけ上げて恰好よく弓形に紐附の標を附ける。

(ロ) **芯　紙**

生半紙又は美濃紙か西内をよく揉んで伸ばし，幅を三つ折にして圖の如く丈幅を裁ち，折をつけておく。

芯　の　裁　方　(前)

第百二十一圖



(ハ) **附　方**

芯紙の中央を紐の中央の裏に合せ，紐附線を揃へて假綴をして置き，前腰幅の中央と紐丈の中央とを合せて標より 0.2 cm 淺き所を捻糸で紙と共に半返に縫ひ附け，厚さを平均する爲め紐の中にて適當に別布を補ひ，紐山に十

分前腰の縫込を含ませ細かく絎けると共に，紐の絎殘も絎け足す。

丈に縫込が多くて前紐幅の中に納まらぬ場合は，其の縫込を紐幅だけに下に折り返し紐附縫目の上に返針にて綴ぢ附け，紐幅より餘りたる部分は下に出して置き，その上に紐の裏側を絎け附ける。

8　後紐附

(イ) 後紐附標の附方

後は紐下標の處で腰幅の間眞直に標を附ける。

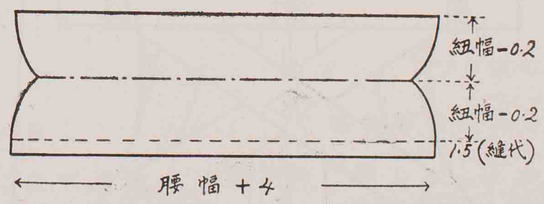
(ロ) 芯

1　美濃紙·西内等は四枚

2　キャンバスは三枚又は四枚重ねミシンを掛けて用ふる。

芯　の　裁　方　(後)

第百二十二圖



圖の如く芯を裁ち折目には通篦をして良く折りを附ける。

(ハ) 後紐の附方

後紐丈の中央と芯丈の中央とを合せて假綴をし，後腰